



読み物教材を活用した授業力を高める「道徳の指導法」の試み：資料分析図による発問の検討を通して

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 北海道教育大学釧路校 公開日: 2017-03-16 キーワード: 作成者: 長谷, 博文 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.32150/00008525

読み物教材を活用した授業力を高める「道徳の指導法」の試み —資料分析図による発問の検討を通して—

長谷博文

北海道教育大学釧路校地域学校教育専攻

A Trial of "Teaching of moral education" to Enhance the Teaching Force by Utilizing the Reading Teaching Materials

—Through the Study of Questioning by Document Analysis Figure—

HASE Hirofumi

Kushiro Campus, Hokkaido University of Education

要旨

学習指導要領一部改正により、「道徳の時間」が「特別の教科 道徳」として教科化されることになった。教科化により、多くの読み物教材が掲載されると予想される教科用図書の使用が義務付けられ、今後は、読み物教材を効果的に活用する授業が一層求められる。本稿では、読み物教材を分析するための資料分析の手法に着目し、資料分析表や資料分析図を用いることで、根拠をもって道徳授業の発問を作成し構成することができることを明らかにした。また、「道徳の指導法」の授業において、資料分析図を用いて発問を構成していく内容を取り入れ、学生にとって資料分析図が効果的なツールであったかどうかを検証した。

1. はじめに

学校教育法施行規則の改正に伴い、平成27年3月に学習指導要領の一部改正があり、「道徳の時間」が「特別の教科 道徳」（以下、「道徳科」という）として新たに位置付けられた。現在、小・中学校では、学習指導要領一部改正の移行措置期間に入っており、道徳の教科化に向けた準備が進められている。

道徳の教科化により大きく変わることとして、教科用図書いわゆる教科書の導入がある。道徳科の教科書については、その内容は明らかになっていないが、文部科学省発行の「私たちの道徳」や「道徳の時間」の副読本に掲載されている「読み物資料」を中心に編集したものになると考えられる。

「読み物資料」については、現行の小学校学習指導要領解説道徳編（文部科学省、2008）（以下、「現行の解説」という）で、読み物資料を生かした指導として、その活用方法などが示されている。学習指導要領一部改正により公表された小学校学習指導要領解説 特別の教科 道徳編（文部科学省、2015）（以下、「道徳科解説」という）では、道徳的価値を扱った読み物を教材の一つとして考えているため、「読み物教材」という名称で解説されており、「読み物資料」という名称は使用されていない。

本稿では、道徳科に対応した内容とするため、現行の解説に関連した内容以外は「読み物教材」という名称を使用することとし、読み物教材の資料分析として論を述べる。

読み物教材の資料分析は、道徳的価値を扱った読み物について、登場する人物の心情の変化や様々な行為を児童がどのように感じるのかを場面ごとに分析し、児童の心を揺さぶる発問をどのように作成し構成するのかを考えることのできるツールである。資料分析については、これまで教育委員会の指導資料や一部の研究者から、様々な手法が発表されている。これらの手法の一部を取り上げ、道徳授業の発問を作成する際に、資料分析が有効であるのかを明らかにしたい。

また、本学釧路校で平成27年度前期に授業を行った「道徳の指導法」の中で、資料分析図を用いた発問の作成を扱ったことから、資料分析図という手法を学生が確実に習得し、活用することで教材の本質を捉えた発問を作成することができたのかを考察する。

2. 研究の目的

本稿の目的は、次のとおりである。

- ① 道徳授業の発問を考える際に、読み物教材の資料分析の有効性を明らかにする。

② 学生が資料分析図の手法を確実に習得し、資料分析図を基にして発問を構成することができたのかを検証するとともに、学生にとって資料分析図が効果的なツールであったかを明らかにする。

3. 研究の方法

2章①については、すでに公表されている教育委員会の指導資料や文献等を用いて資料分析の手法を取り上げ、その効果について考察する。

2章②については、平成27年度前期に実施した「道徳の指導法」の授業により、提出されたレポート等から、資料分析図の習得状況や適切な発問構成の適否について検証し、その効果について考察する。

4. 読み物教材の資料分析

(1) 学習指導要領解説による読み物教材の分析

現行の解説では、言葉を生かし考えを深める工夫として、次のように記述されている。

(略) 読み物資料であれば、どの場面での、どの登場人物の、どのような行為や、判断、動機などの何について考えるのかをよりの確に、より具体的に示さなければならぬ。そのためには、指導者自身が、読み物資料の構造や表現の意図、そこに含まれる道徳的価値や人間観を深く理解し、さらに、児童の発達の段階や実態を考慮に入れ、児童一人一人が資料の内容をつかみ、自分の考えをもつことができるようにすることが大切である。

(p.96, 下線は筆者)

ここでは、読み物資料を用いて道徳授業を行う際に、授業者がしっかりと読み物資料に含まれている道徳的価値や人間観を把握し、この資料で児童に何を考えさせたいのかという意図をもち授業を行うよう示されている。

また、読み物資料の場面ごとの登場人物の心の変化を捉えて、その行為や判断、動機について読み取り、児童に何を考えさせていくのかを明確にすることが示されている。

道徳科解説では、これまで読み物資料とされていた資料を教材の一つと考え、読み物教材と名称を変更した。読み物教材についての扱いについては、多様な考えを生かすための言語活動として、次のように記述されている。

(略) 読み物教材であれば、どの場面の、どの登場人物の、どのような行為や判断、動機などの何について自分との関わりで考えるのかをよりの確に、より具体的に示さなければならぬ。そのためには、指導者自身が、児童観を明確にして、教材の構造やそこに含まれる道徳的価値を深く理解し、さらに、児童の発達の段階や実態を考慮に入れ、児童一人一人が道徳的価値について自分の考えをもつことができるようにすることが大切である。

(p.90, 下線は筆者)

現行の解説と道徳科解説を比較すると、授業者が読み物教材の構造を理解することには変わりはないことが分かる。読み物教材を用いて児童に考えさせることは、道徳科解説では「自分との関わりで」という文言が追加されており、児童はこれまでの生き方を振り返り、自分ごととして考えていくよう強調されている

また、「道徳的価値について自分の考えをもつことができるように」とあるように、道徳的価値の自覚を意識した指導をすることが求められている。

そのため、読み物教材にどのような道徳的価値が含まれるのかを授業者が分析し理解するとともに、児童に考えさせたい内容を明確にして、発問を構成していかなければならない。

読み物教材の内容を把握するだけでは、道徳性の諸様相である道徳的判断力や道徳的心情、道徳の実践意欲と態度を養うには不十分である。教師が読み物教材の魅力を感じ、そこに含まれている道徳的価値を理解した上で授業を行うことで、児童がこれまでの経験に照らし合わせながら授業で扱う道徳的価値について考え、深めていくことができる。

(2) 読み物教材の資料分析の手法

① 登場人物の行為・心情を明記した資料分析表

広島県教育委員会では、道徳教育の指導資料として「読み物教材例集・授業展開例集」(2011)を発行しており、その中で、資料分析表の活用が示されている。

資料分析表では、図1のように「資料場面」、「登場人物の行為・心情(中心人物、その他の人物)」、「中心人物の心情」、「児童の意識の流れ」と、読み物教材の場面を区切りながらそれぞれの項目について記述するようになっている。特に、中心人物の行為と心情を分けて記述することで、行為を支える心情の変化を捉えやすくしている。

○ に 医 者 な る	資料 場 面
救 人 ず れ 父 の 言 語 を 忘 れ ず に 迷 わ ら な い	中 心 人 物 登 場 人 物 の 行 為 ・ 心 情
な た も 人 の 言 語 を 忘 れ ず に 迷 わ ら な い	そ の 他 の 人 物
父 の 後 を 継 い て 医 者 に な る	中 心 人 物 の 心 情
い ら ち 町 に い る お 父 さ ん を 救 え な さ な い 病 人 を 救 え な い 医 生 が な ら な い	意 識 の 流 れ
○ に 医 者 な る	意 識 の 流 れ

【図1】中心人物の行為と心情を明記した資料分析表のイメージ

道徳授業の発問を考える際には、場面ごとの時系列的な発問だけでは、登場人物の心情を問うだけの平坦な授業になるため、授業で取り上げる発問は、資料分析表で分けて記入した資料場面から絞っていく作業が必要であることが示されている。

この資料分析表では、「児童の意識」の流れを項目としていることから、学習指導案を作成する際には、児童の思考の流れを踏まえながら作成することができると考える。

また、発問を考える際にも、中心人物とその他の人物に分けて行為や心情を記入するため、道徳的価値が含まれる行為を捉えやすくなり、中心人物と周りの人物との関係を踏まえて発問を構成することができる。

② 主人公の気持ちを中心とした資料分析表

「道徳教育」(2015年8月)に掲載されている玉川大学教師教育リサーチセンター客員教授の後藤忠氏による資料分析表について述べる。

後藤氏の説明する資料分析表では、読み物教材の主人公の気持ちが微妙に変化するところで細かく場面を分け、場面ごとの主人公の気持ちを表に記入する。また、読み物教材に書かれている主人公の気持ちを全て記入することで、児童の反応を予想することができると述べている。

A 場面の概要・keyword	B 主人公の気持ち	C 発問
①1行目～2行目 山の中の谷川の本橋		
②3行目～11行目 うさぎに「こら、こら」「もどれもどれ」と言う。	・何だ、うさぎか ・弱そうだ ・じゃまだ ・脅かしてやろう ・いじわるしてやろう ・俺が先に通る ・俺が強いぞ	
③12行目～13行目 うさぎがもどっていく。 「えへん、えへん」	・いじわるって面白いな ・いじわるって楽しいな ・いい気持ち ・まいったか ・もっとやりたい	

〔図2〕気持ちを詳細に記述した資料分析表のイメージ

場面ごとの主人公の気持ちを詳細に記入しておくことにより、授業での児童の様々な発言に対応することができ、児童の多様な考え方を想定して授業づくりを進めることができる。この資料分析表では、読み物教材の内容を様々な角度から分析し、主人公の内面を探ることから、読み物教材に含まれている道徳的価値を表出される作業になると考える。

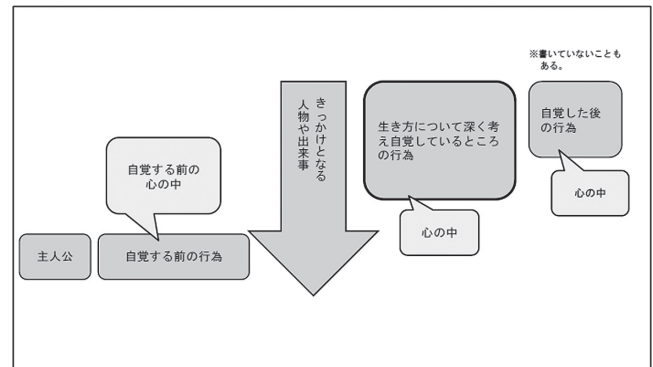
また、中心発問を考える際には、本時のねらいと細かく分類された場面を照らし合わせながら、児童に最も考えさせたい場面を選び、発問表現を考えることができる。中心発問が決まったら、残りの場面から中心発問を生かすための基本発問となる場面を選び、発問構成を考えることができる。

図2のように、シンプルでありながら主人公の気持ちを詳細に記述する表を作ることにより、読み物教材の全体像が明らかになり、ねらいとする道徳的価値に迫ることのできる授業づくりができると考える。

③ 読み物教材の構造を捉えるための資料分析図

京都府教育委員会では、「道徳教育の進め方 京都式ハンドブック」(2013)を発行し、読み物教材の話の流れを構造的に表すための資料分析図を掲載している。

資料分析図では、特定の記号を使い、主人公の心情が変化する前と変化した後が視覚的に分かるように図で表している。特に、主人公の心情が変化するきっかけとなった人物や出来事については、矢印の記号を使うことで、矢印の前後で心情の変化がわかるように工夫されている。



〔図3〕主人公の心情の変化を図で示した資料分析図のイメージ

読み物教材では、主人公が他の人の言葉や行為をきっかけとして、道徳的行為という視点で考えたときに自身の至らなさに気付いたり、これまで行ってきた行為の意味を問い直したりと、自分の言動を振り返って道徳的価値を自覚していくという展開が多い。しかし、道徳授業の経験が浅い教員や道徳授業をまだ行っていない学生には、読み物教材の構成を理解するのは難しい。

図3のような資料分析図を作成し、発問を考える作業を行うことにより、読み物教材の流れを把握しながら、主人公の心情の変化を構造的に理解することができる。さらに、資料分析図では、主人公の生き方について深く考え自覚する場面を中心場面としており、この中心場面を中心発問としていくことで、なぜこの発問を中心発問にしたのかという根拠をもつことができると考える。読み物教材によっては、中心場面の記述が少ないため、きっかけとなる人物や出来事を取り上げて、中心発問にすることもある。

(3) 読み物教材の資料分析の有効性

読み物教材の資料分析には、資料分析表と資料分析図のように「表」と「図」の2つの分析方法がある。それぞれに長所があり、授業を行う教師の経験年数や授業の目的、読み物教材の性質によって使い分けていくことがよいと考える。

資料分析表の長所としては、主人公（または中心人物）の行為を支える心情を詳細に記入することができ、授業での児童の発言の予測をしっかりと行えることがある。そのこ

とにより、教師は、読み物教材で児童がどの場面でどのようなことを感じ、考えるのかを想定しながら授業づくりを進めていくことができる。

一方、資料分析図では、読み物教材の全体像を視覚的に把握することができ、主人公が道徳的価値について自覚する前後の行為を捉えることができる。また、中心場面を明確にしていくことから、中心発問を検討する際に根拠をもって発問を考えることができる。

資料分析表と資料分析図は、その表現方法は異なるが、どちらも道徳授業で重要となる発問の作成・構成のための基礎資料である。

道徳授業では、なぜこの発問としたのか、なぜこの発問順に授業を行ったのかということが曖昧な授業がある。この原因として次の3点があると考えられる。

①すでに作成された学習指導案の発問をそのまま使用

他の授業者が作成した学習指導案をそのまま使用するだけで、記述されている発問の意図を読み取らずに授業を行っている。

②児童の実態に合っていない授業展開

児童の反応予測などをせずに、読み物教材の展開例を掲載した活用集や指導書などから内容を転用するため、児童の実態に合っていない授業展開となっている。

③読み物教材への理解が不十分

読み物教材に含まれている道徳的価値の理解が不十分であり、その教材で何を考えさせ、何を伝えたいのかという教材観をもたずに授業を行っている。

上記の①～③は、教員養成系大学での授業や教員採用後の教育委員会主催の研修会等においても、道徳授業の発問の作成方法についてほとんど取り上げていないということが、要因になっているのではないだろうか。

大学の授業や教員の各種研修会等で、資料分析表や資料分析図などの方法を活用して道徳授業の発問を考えていくという内容を取り入れる機会が増えるなら、道徳授業を改善することができ、道徳科の特質を踏まえた質の高い授業が行われるようになるであろう。

ただし、これらの方法は、読み物教材の内容によっては、その効果は低くなることもある。例えば、使用する読み物教材が主人公の心情の変化がはっきりと読み取れるのであれば、資料分析は効果的な方法になるが、主人公が忍耐強く一つのことをやり遂げるようなストーリーであれば資料分析から発問構成を考えていくことは難しくなる。

また、資料分析という手法だけにとらわれてしまい、読み物教材に含まれている道徳的価値の理解が不十分となり、授業者としての教材観をもたずに授業を行うことはあってはならないことである。

資料分析は、読み物教材の性質を考慮しながら活用し、授業を行う学級の児童の実態を踏まえて授業づくりを進めることで、効果を発揮することができる。道徳授業の経験が浅い教師には、発問の作成をする際に有効な手段となり、

経験豊富な教師には、自身の授業を見直す際のツールとして活用することができるであろう。

5. 資料分析図を用いた「道徳の指導法」の授業

平成27年度前期に実施した「道徳の指導法」の到達目標の一つに「資料分析や発問構成の方法を理解し、道徳の時間の学習指導案を作成する。」を掲げ、授業を行った。学習指導案の作成については、各教科の教科教育法の授業で学習しているが、道徳授業で重要な要素となる、読み物教材に含まれている道徳的価値の捉えや、本時で扱う道徳的価値に迫る発問の作成方法などについて、系統的に学ばせる必要があると考えた。

そこで、学生が発問を考えるためのツールとして資料分析図を用いることとした。資料分析図については、4章(2)③で述べた京都府教育委員会が発行した「道徳教育の進め方 京都式ハンドブック」(以下、「ハンドブック」という)で示されている手法を活用した。これは、読み物教材の内容を視覚的に捉えることができることから、道徳学習指導案を初めて作成する学生にとって理解しやすいと考えたためである。また、道徳授業の特徴の一つである中心発問の役割や基本発問の位置付けなどについても、ハンドブックで示されている資料分析図を用いることで理解を深めることができると考えた。

(1)「道徳の指導法」のねらい・内容

受講対象を2年生とした「道徳の指導法」のねらい・内容について、シラバスの記述から確認する。

①授業の目的

- 学校教育における道徳教育の位置付けについて理解することができる。
- 小・中学校における道徳教育及び道徳の時間のねらいや内容について理解することができる。
- 道徳の時間の授業づくりを進めることができる。

②到達目標

- 道徳教育の歴史や道徳性の発達等について理解する。
- 学習指導要領や実践事例を基に、道徳教育及び道徳の時間のねらいや内容について、必要な知識・技能を習得する。
- 資料分析や発問構成の方法を理解し、道徳の時間の学習指導案を作成する。

③授業計画

第1時	オリエンテーション
第2時	道徳教育の基本的な在り方
第3時	道徳性の発達、社会の変化と道徳教育
第4時	道徳教育と道徳の時間
第5時	道徳教育における生徒指導
第6時	道徳の指導計画
第7時	道徳教育と学級経営、教科教育との関連
第8時	道徳の時間の授業の実際

第9時	道徳の時間の指導過程
第10時	道徳の内容項目
第11時	読み物資料の活用・分析
第12時	道徳の時間の指導方法の工夫
第13～15時	道徳の時間の学習指導案の作成

(2) 授業の実際

平成27年度前期に実施した授業のため、平成27年3月に一部改正された学習指導要領(2015)は公表されていたが、解説は同年7月に発表されたため、本授業では、現行の学習指導要領(2008年)に基づき実施した。したがって、「道徳の時間」の指導過程の理解や学習指導案の作成を中心に授業を行うことにした。

第2時から第7時までは、道徳教育の歴史や道徳性の発達、学習指導要領に示されている道徳教育及び道徳の時間のねらいや内容等について、理解することができるよう実践例を交えたり、演習を取り入れたりして授業を行った。

第8時から、道徳の時間の学習指導案を作成するために必要な知識や技能を習得することができるように、演習を中心に進めた。まず、第8時では、釧路市内の小学校教諭の道徳授業を動画で視聴した。ストップモーション方式を取り入れ、主に指導過程ごとに視聴し、個人で気付いたことをグループで協議して深めていくようにした。

第9・10時は1単位時間の指導過程や内容項目について、前時に視聴した道徳授業を振り返りながら確認した。

第11時には、読み物教材の資料分析について説明した後、「私たちの道徳 第5・6学年」(文部科学省, 2014)に掲載されている「最後のおくり物」を教材として資料分析図を作成させた。第12時以降は、資料分析図を基に発問を考えさせ、学習指導案を作成するようにした。

学習指導案の項目ごとの作成手順は次のとおりである。

- ①「主題名」「資料名」の確認
- ②「**主題設定の理由**」の作成
- ③「本時のねらい」の作成
- ④読み物教材の**資料分析図**の作成
- ⑤資料分析図を基にした**中心発問**の作成
- ⑥中心発問を生かすための**基本発問**の作成
- ⑦「展開前段」の作成
- ⑧「導入」の作成
- ⑨「展開後段」の作成
- ⑩「終末」の作成
- ⑪「板書計画」の作成

資料分析図を作成することで、中心場面がはっきりとするため、中心発問や基本発問を作成するのが容易になる。しかし、手法だけを身に付けて、授業の展開を安易に作成することのないようにしなければならない。道徳授業では、児童の内面的資質を養うことをねらいとしていることから、使用する読み物教材についての教材観をもち、道徳の時間の特徴を踏まえて授業をしてもらいたい。

そのため、手順②では、「主題設定の理由」を考える時間を設け、本時で扱う道徳的価値について自分なりの考えをもたせることとした。現行の解説を参考として、1単位時間の中で児童に何を気付かせ、どんな心情や態度を育みたいのかを記入させた。

授業の中で示した記入例は次のとおりである。

<作成例>

3 主題設定の理由

(1) ねらいとする価値について

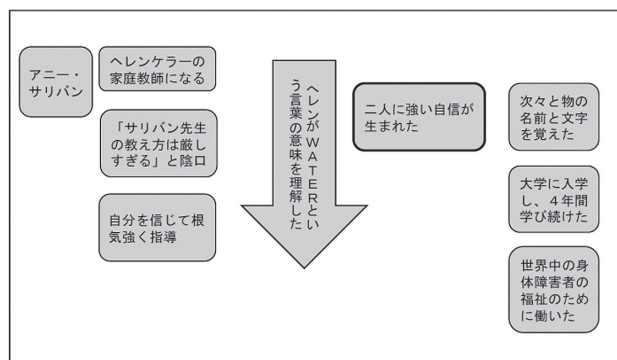
本主題は、内容項目1-(2)「勇氣と希望」をねらいとしている。高学年の児童は、夢と現実の違いを意識したり、そのギャップに悩んだりする時期であることから、偉人の生き方を通して、希望をもつことの大切さに気付かせることで、希望をもってくじけないで努力する心情を育むことができると考える。

記入例を基に、使用する読み物教材でどのような授業を行いたいのかを構想することができた。

(3) 資料分析図による発問構成の検討

資料分析図の作成方法については、「私たちの道徳 第5・6学年」に掲載されている「ヘレンと共に－アニー・サリバン－」を教材として、図4のスライドを提示しながら説明した。

読み物教材の分析(例:「ヘレンと共に－アニー・サリバン－」)



〔図4〕資料分析図の作成方法の説明で使用したスライド

本教材は、中心場面となる文章の記述が少ないことから、「ヘレンがWATERという言葉の意味を理解した」というサリバン先生の教えをヘレンが理解できた場面を中心発問とすることなどを説明した。

その後、「最後のおくり物」を教材として資料分析図を個人で作成し、グループ内で検討するという演習を行った。作成した資料分析図を基に、中心発問を考えさせ、①なぜその場面を選んだのか、②選んだ場面から何を児童に考えさせたいのか、③中心発問の発問表現は適切か、の3点についてグループ内で協議を行った。中心発問の発問表現や場面の選択で迷った学生には、本時のねらいに正対しているかどうかを検討するよう助言した。

中心発問を作成した後は、同様の手順でグループ内で基本発問の作成について協議を行った。

道徳授業では、展開前段の発問の順序は「基本発問－基本発問－中心発問」か、「基本発問－中心発問－基本発問」となることが多いことを説明した。その説明を受け、グループ内で自分たちが作成した発問について、どの順で発問すると効果的なのかを検討していた。

授業では、グループ協議を取り入れたこともあり、資料分析図の作成から発問構成の検討まで意欲的に取り組んでいた。授業後に提出された学習指導案を見ると、ほとんどの学生が、授業で目指していた形の学習指導案を作成することができていた。

(4) 資料分析図の作成及び発問構成の適切さの検証

資料分析図から発問構成を考える力を付けることができたかどうかについて、授業の最後に、最終レポート（学習指導案）を作成する課題を与え、検証した。最終レポートは、道徳的価値を含んだ自作資料を指定の読み物教材とし、資料分析図の作成から中心発問と基本発問をどのように検討したのかが分かるように記述させた。

最終レポートから判断した作成状況の結果は、表1のとおりである。

表1 最終レポートの結果

	適切に作成したと判断	やや不十分と判断	不十分と判断
資料分析図の作成	64.7%	8.8%	26.5%
発問の検討・作成	34.3%	45.1%	20.6%

(対象学生：102名)

この結果から、中心場面をしっかりと捉えたり、話の流れを構造的に捉えるなど、適切に資料分析図を作成した学生の割合は64.7%であった。反面、資料分析図の作成が「やや不十分」、「不十分」の学生を合わせると35.3%となり、3割強の学生は作成方法が身に付いていないことが分かった。

身に付いていない学生の資料分析図を分析すると、次ような特徴があった。

- 読み物教材のストーリーを捉えていない
- 資料分析図の記入方法を理解していない
- 授業で説明したのとは違う記号を用いるなど、自分のルールを決めて作成している
- 主人公の心情が変化した場面や中心となる場面を捉えていない

この結果から、授業で扱っていない記号を使い、自分でルールを決めて作成するなど、作成方法が定着していないことが確認できた。また、読み物教材のストーリーや主人公

の心情の変化を捉えていないことから、読み物教材とじっくりと向き合って資料分析図を作成していないことが明らかになった。

さらに、最終レポートの結果から、資料分析図を適切に作成している学生が64.7%であるが、資料分析図から発問を適切に検討し作成できた学生は34.3%と半減している。これは、①作成した発問が資料分析図と関連しておらず、資料分析図の活用がなされていない、②中心発問を設定した場面が、中心場面やきっかけとなった出来事ではなく明らかに違う場面となっている、③発問の順序を考慮しておらず、中心発問を生かすための基本発問になっていない、などの状況が見られた。

このことから、資料分析図を作成しても、そこから発問を作成し構成していくことに難しさがあることが明らかになった。授業では、中心場面さえ捉えることができれば、中心発問や基本発問を容易に考えることができると想定していたが、今回の結果から、資料分析図を基にした発問の作成方法を丁寧に指導する必要がある。

また、グループ協議は活発に行っているように感じていたが、3名程度の少人数グループであったため、グループごとの理解度の差が協議の質に影響し、最終レポートの結果につながったとも考えられる。グループについては、4～6名程度のグループを作成し協議する人数を増やしたり、資料分析図の作成時と発問の検討・作成時でグループのメンバーを変更したりするなど、協議の質を高めるための改善を図っていく必要がある。

6. まとめと今後の課題

読み物教材の資料分析については、教師が道徳授業を考える際に、教材の内容を構造的に理解することができ、中心場面を明確にしながら発問を検討し作成していくことに有効な手段であることが分かった。

道徳科の授業では、今後、主たる教材として教科用図書いわゆる教科書の使用が義務化され、教科書に掲載されている読み物教材を使った授業を行うことが求められる。その際、授業者として読み物教材をどのように分析し理解したのか、この教材から何を学ばせたいのかなど、教師の力量が問われてくるであろう。

教師のこれまでの人生経験や主観的なものの見方だけで授業を行うことは、一方的な価値観を児童に押し付ける危険性を含んでおり、道徳科が目指している授業とはかけ離れたものになる可能性もある。

教科書に掲載された読み物教材を用いて道徳科の特質を生かした授業を行うために、本稿で考察した資料分析表や資料分析図を活用し、客観的に教材を分析することで、児童の内面的資質を養う授業づくりを進めていくことができると考える。

新学習指導要領の完全実施に向けて、教師は校内外の研修の機会を通して、読み物教材を効果的に活用するための

手法を学び、授業づくりの力量を高めていくことが必要である。

資料分析図を用いた「道徳の指導法」の授業では、発問作成の根拠をもたせるという点については一定の成果があったと考える。授業の中で、発問の作成方法を習わずに、学習指導案を考えさせると、以前に誰かが作成した学習指導案を参考または模倣して作成することになる。本時で扱う道徳的価値についてじっくりと考えさせた後、資料分析図を用いて発問を検討し、作成していくという過程を経ることで、道徳授業をつくるための基本的な考え方や順序を確認することができた。

しかし、最終レポートによる検証では、半数以上の学生が発問の検討・作成でつまづいていることが明らかになり、今後、「道徳の指導法」の授業を行う上で改善すべき点を明らかにすることができた。具体的には、①資料分析図の作成上の留意点を事例を基に繰り返し説明する、②資料分析図から発問を検討し作成するまでの過程を具体例を基に説明する、③グループ協議のメンバーを固定化しない、などのことが考えられる。

今後は、学校現場の教師と連携しながら資料分析の有効性について考察していく必要がある。児童の実態を踏まえながら、資料分析表や資料分析図を用いた学習指導案を作成し、授業実践を通してその有効性を検証することができるよう、教育研究団体と連携しながら研究を進めていきたい。

また、「道徳の指導法」の授業については、最終レポートの結果をさらに詳細に分析し、授業内容・方法の改善を図り、「適切に作成したと判断」した学生の割合を高めていくことができるよう実践していく。

引用・参考文献

文部科学省，2008，小学校学習指導要領解説 道徳編，東洋館出版，p96.

文部科学省，2015，小学校学習指導要領解説 特別の教科道徳編，p90.

広島県教育委員会，2011，広島県道徳教育指導資料「読み物教材例集・授業展開例集」，p14，p21.

後藤忠，2015，「道徳授業の指導案」書き方教室，道徳教育8月号，明治図書，p74-75.

京都府教育委員会，2013，道徳教育の進め方 京都式ハンドブック，p14-19

文部科学省，2014，私たちの道徳 第5・6学年，廣済堂あかつき，p22-25.，p66-69.

長谷博文，2015，道徳科の実践的指導力を育む「道徳の指導法」の試み，日本道徳教育学会第86回大会プログラム・発表要旨資料，p112-113.